



「早市」にみる中国社会の姿

ほく
北 菫

●早稲田大学HRM研究所・招聘研究員

最近の中国に対しては、「爆買い」や有人宇宙ロケットの打ち上げに代表される経済・技術発展のイメージがあるだろう。あるいは南シナ海問題や尖閣諸島問題等での強硬姿勢から、良くないイメージを持つ方も多いただろう。

実際に、平成28年1月に日本の内閣府が発表した調査結果によると「中国に親しみを感ぜない」、「どちらかというとなら親しみを感ぜない」という回答が合わせて83.2%となり、過去最高を記録したという。また、書店にいけば「中国経済はいずれ崩壊する」といったタイトルの本がたくさんある。これらを見るとどこかで「中国の失敗」を願い、「ざまあみろ」と思いたい人が多いのだろう、と思わされる。

中国に対するイメージは、主にマスメディアによって形成されていると思われる。確かに、報道に出てくる中国政府の尖閣諸島や南シナ海問題での態度や、日本に対する言動を見るとイメージが悪くなるのもうなずける。

ただ、「中国」や「中国人」といったマクロのとらえ方では悪いイメージを持つ人も、個別の中国人に対しては別に何とも思わない人が多いのではないだろうか。

筆者自身は中国出身だが、日本に来てもうすぐ20年になる。今では日本の便利さや清潔さを享受し、日本人の考え方に違和感を覚えることもほぼない。逆に、たまに中国に帰ると日本との違いに驚き、時にはあきれ、ストレスを感じることも多

い。その一方で、日本人や日本社会から失われた中国人のむき出しの荒々しさを伴ったパワーやエネルギー、物事に「柔軟に」対応するしたたかさ、理不尽なことや困難を笑い飛ばしてしまうたくましさも感じるのである。

このエッセーでは、筆者が中国へ帰省した際に見た中国の「老百姓（ラオバイシン：庶民のこと）」の生活や行動から垣間見えたおかしさや、たくましさについて書いてみたい。

中国の朝は早い。朝5時頃から人々が公園に集まりはじめ、散歩やジョギング、体操やダンス、様々なスポーツや武術に汗を流している。中には、周囲に響きわたる大声で歌ったり、京劇の発声練習をしている人もいる。（これが結構迷惑なのだが）

筆者の実家がある団地では、毎日「早市」が開かれる。日本でいえば、朝市である。日本の朝市は、青果物や海産物を売るイメージが強いが中国の「早市」はなんでもありである。

筆者は、帰省すると毎朝「早市」を見るのが楽しみの一つである。市といっても店舗があるわけではなく、出店者が路上で売るスタイルである。また、出店者も固定されているわけではなく、時々入れ替わりもあるため、時に「何でこんなものを売るんだろう？」と思いたくなるような出店者もいる。

先日は、「髪染め屋」が出店していた。椅子を置き、客が来るとその場で髪を染めてくれるのだ。

こんな朝早くからわざわざ髪を染める人がいるのかと思ったが、ちゃんとお客さんがいるのである。その日は、4、5人の中年のおじさんが客として椅子に並んで座っていた。たくさんの買い物客が行き交う中で、汚れ防止のカバーを頭からすっぽりかぶり、髪が染め終わるのを待ちながら、世間話が始まった。1人は「年金はいくらもらえるの?」と聞くと、1人は「2000元ぐらい」、もう1人は「俺は2600元ちょい」、別の1人は「良いじゃない、俺は1500元しかももらえないよ、おまえが羨ましい」。すると、その人が「まあまあ、今は願いが一つしかない。1年でも長く生きられるように共産党のお金をいただこう、おまえは金額が少ないが俺より長く生きていけばきっと元が取れる」。周りの人も納得したような顔で「そうだな、長く生きていけば良いこともあるよ」とうなずきあっていた。おじさんたちの姿がとてもシュールで思わず笑ってしまった。

また、思わぬところで中国の「愛国精神」を垣間見ることもある。殺虫剤を売る店では、テーブルの上に色々な殺虫剤が並べられている。その中のゴキブリ用の殺虫剤にはなぜか大海原に浮かぶ島の写真があしらわれており、よく見ると「釣魚島（尖閣諸島）」という文字と、「釣魚島は中国のものだ!」というスローガンが印刷されていた。ゴキブリと尖閣諸島にどのような関係があるかは全く不明だが、店主は「寄ってらっしゃい、みてらっしゃい! 釣魚島のゴキブリもこれを使ったら一発で死んだから絶対強力だよ! 今日は特売、特売ですよ」と大声で叫んでいた、通り過ぎた人々が笑っていたが買う人は現れなかった。「愛国精神」は立派だが、効能にはあまり関係ないような気が…。

また、「早市」ではエンターテインメントを堪能することもできる。その日は、家庭用製麺機を売るおじさんがいた。実際に粉をこねて種をつくり、それを製麺機で製麺する実演をしているのだが、このおじさん、製麺機の実演よりも客寄せの口上の方に力が入っている。初めは、「この製麺機を使えば手軽に麺が作れるよ」という普通の口上だったのが、だんだん興が乗ってきて、「俺があまり熱心に麺ばかり作って女房をかまってい

ないから、女房は男と浮気して出ていっちゃまった!」「今じゃ俺のところにあるのはこの製麺機だけだ! 持ってけドロボー!」と叫び始めた。かと思うと、集まった客に「麺は胃にやさしいよ、昔の国家幹部で麺が大好きな人は皆長寿だった。毛沢東、鄧小平、林彪、……」、「ところで林彪はどうやって死んだか知ってるかい?」と話しかける。すると客の中の別のおじさんが「飛行機の事故で、墜落死だ」と応じる。すると、製麺機売りのおじさんは「違うね! 実は確かに毛沢東は林彪が逃亡してしまうのは仕方がないと言っていたが、周恩来は黙っていられなかった。国家機密をソ連に持っていかれたら困るので、そこで撃墜命令を出したんだ」と返すと、客のおじさんが「あらま、そんな“国家機密”をここで漏らしているの? 明日から製麺機ごと消されちゃうぞ!」とやり返す。「なら、皆今日この製麺機を買ってくれないと明日はなくなるぞ」と製麺機売りのおじさんは言い返す。そのやり取りはまるで漫才を見ているようで大笑いしてしまった。結局、製麺機は売れなかったが。

日本に住んでいる筆者は中国の社会事情を日本のメディアを通して知ることが多い。今や日本を上回る経済規模を持ち、軍事力も増強された中国社会では、市民への言論統制が強化されているという報道もみられる。しかし、庶民が集まる「早市」で、共産党に対する皮肉や政治的に敏感な話題を漫才のネタのように喋っている人たちをみると、日本では想像できない中国社会の気楽さを感じることができる。

筆者は中国における国有企業の私有化プロセスを研究してきた。そのなかで企業の経営形態が変化するなかにあっても変わることのない企業文化もあることに注目してきた。社会や政治が変化していくなかにあっても、そのなかでは変化していくものばかりでなく、意識や文化など、変化せずに人びとの生活を支え続けるものがある。「早市」でみられる中国人の滑稽さやたくましさ。これも社会が変化するなかにあっても変わることのない、中国社会の一面といえるだろう。